

---

# 純白の心に血色の模様

緋翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

純白の心に血色の模様

### 【著者名】

ZZマーク

### 【作者名】 緋翠

### 【あらすじ】

ただ普通に過「」したかった。そう願っていたある野球部相手にゲ  
ームが始まる。「皆様にはゲームをしてもらいます。」その一言で  
始まつて殺し合いという名のゲーム。平凡な日常に戻ることはでき  
るのか、生きて帰ることができるのか。始まる裏切りの連鎖。野球  
部の運命はどうなるのか。

## FH-LEO・プロローグ（前書き）

この物語は、バッドハンドで終わる可能性が高いです。  
できるだけ、早く更新できるようにがんばりますが、遅くなる可能  
性があることをじつて承ります。  
感想・レジスト等お待ちしております。

## FILEO・プロローグ

「やつぱり、行ってしまうのね。」

悲しみを含んだ声がコンクリートのビルの間で反響する。

「俺のことはもう忘れる」

黒いコートに身を包んだ男はただそうこうと反対方向に向かって進みだした。

冷たい風が吹く。

周りのビルからの灯はなかつた。ただ月の光があたりを照らす。

「・・・さよなら、私の愛する人。」

女は十分の間を空けた後擠り出すように口を開いた。

その声は心なしか震えていた。

遠くの闇にパトカーのサイレンが小さく聞こえた。

## FHLE1・偽りの平穂エ (前書き)

FHLE1は、何回かにわたってお送りします。  
これ以後、このようなことがあると思いますので、ご了承ください。  
また、ご意見、ご感想を募集しています。

「終わつた～！～」

チャイムが鳴りおわつた数秒後、  
とてつもなく大きな声が教室に木靈する。

「和磨がこんなのでいいのか・・・

仮にも部長ならもつと威厳をも

「はいはい、もういいだろ、聯弩？

悪かつたな、威厳がなくて。」

ブツブツと言い出す少年を大声でしゃべつた少年がほんの少しの怒  
をこじませた声でとめる。

肩まである茶髪の髪が少しうれた。

その声にやつと文句を言つことをやめた少年の方耳に一連のシンプルなピアスがあるところを見ると、

この学校、かなり校風が自由なのがうかがえる。  
未だに不満そうな顔をしているのが聯弩。

表情を一転させ、明るい表情で前を歩いているのが和磨といいうじ  
い。

「生島先輩！」

「ああ、健か。」

「これから部活つすよね。

一緒に行きませんか？」

「ああ、いいぜ。

聯弩もいるけどな。」

「！！藤城先輩、居たんっすか！？」

「失礼な・・・一年生ならもつと前に気がついて挨拶するべきだらつ・  
・

またか、菊地はわざと無視をし

「まあまあ、健に限つてそんなことは無いぞ。

疑いすぎだぞ、聯鷹。」

一年生だといふこの元気な少年いや、

菊地健によると和磨といふ男は、姓を生島。

聯鷹といふ男は姓を藤城ふじきといふらしい。

そのまま、たわいのない世間話が続く。

健が話しかけ、聯鷹が文句をいい、和磨が止める。

それは、いつものことのように、

それが日常であるような自然さで行われていた。

「ついたぞ。」

そういうつて来たのは「野球部」と書かれている部室。

和磨は手馴れた様子でドアを開ける。

「いつも早いな。野！」

「そうかな、僕はいつものように来ているだけだよ、和磨。」

「そんなことないですよ、神櫂先輩、

いつも誰よりも早く着てるじゃないですか！」

「なんだ、菊地。

俺たちが遅いとでも言いたいのか、

いや、菊地に限つてそんなこと・・・

「違いますよー！」

藤城先輩！！

そんなことあるわけないじゃないすか！

「そうかそれなら・・・

暗い部室の中、長髪の黒髪の少年がいた。

和磨はまるで、それが当然であるかのように、

満面の笑みを作つて話しかける。

黒髪の少年、神櫂野じんかいのが、顔に微笑をたたえて否定する。

健が否定し、例の「ごとく健と聯鷹の言い争いが始まつてからも

野の微笑はとまることがなかつた。

その微笑をたたえたまま、彼は漠然と呟いた。

「今まで、この平穏が続くのだろうか・・・。」

と、

「続けさせるや。」

優勝したいんだ。このメンバーで。

中学最後の大会を。」

和磨が、力強い声で宣言した。

その顔は、自信と希望で満ちていた。

後に野の懸念は現実になる。

近い将来、そのことを知っていたのは  
今ここにはいなかつた。

## FILE1・偽りの平穏トーン（前書き）

お待たせいたしてすみません。

これからは、早めにこゝでできるようがんばりたいので、これからもよろしくお願ひします。

## FILE 1・偽りの平穡エエ

外からは運動部たちの声が聞こえてくる中、此処、野球部の部室内では、異様な空気が流れていた。

「いぐらなんでも、遅くない？信ひやん」

大きなため息とともに大げさに肩をすくめて発言する彼に、隣にいた紺色の髪と、黒色の瞳の少年があきれたように発言する。

「俺は、アンタの遅刻癖のほうが酷いと思うがな、謙一。」

それに、アイツの遅刻癖はいつものことだろ？

「おいおい、それは酷いだろ？？」

仮にも監督に向かつて。

何ならグランドでも走つてみるか？

滋蛾。」

後ろからかかつた声に滋賀は一瞬驚いた顔をしてから心底嫌そうな顔をしてとても丁寧にとはいえないような口調で断つた。

「グランドなんて、冗談じゃない。絶対に嫌だね。」

「アホか！ 優晴！」

それが信ちゃんに怒られてるやつの言葉か！？

ちゃんとあやまれつづーの！…」

ここぞといっぱかりに食つて掛かる少年に滋賀はさらりに辛辣な言葉を並べる。

「あんたに言われたくないね。この、右ボンバーへッ。ア。

いつもよくそんなに寝癖をつけられるな。謙一。」

「ああ、お前も同罪だぞ、誹謗。」

「ええ～そんなん～！～

つていうか、これは元からだつづーの！…・・・

後ろで、まだ何かいつている謙一を見事に無視して監督、由布院信吾、通称信ちゃんは部員を見渡し連絡事項を話していた。

「皆に集まって貰ったのは、

一週間後に、合宿決定したからだ。」

なんでもないようにしていたその瞬間に部活内にじよめきが起つた。

「すみません。何で急に合宿なんて？」

部員全員の疑問を代弁するように部長、和磨は戸惑いながらも疑問を口にする。

その当然とも言える疑問に監督は晴れ晴れと笑つてのけた。

「今日決まったからだ。」

なんでもないようになつてのけたその言葉に、野球部一同声が出なかつたのは、見間違えではないだらう。

「信じられないな・・・あのアホ監督。そう思わないか、絆創膏男。

「同感、つていうか、アンナン監督やつてて言い訳ー!?

帰り道、心底馬鹿にしている様子の優晴に、何度も頷いて同意しているのは、健だった。

鼻に常につけていた絆創膏からそのあだ名がついたらしく、常ならばそのあだ名に反抗する健だったが、今回はそうするつもりもないらし。

「つていうより、

監督、信ちゃん殻誰かに代わつて欲しいよね~。

「お前は黙つてろ!！」

「うわあ・・・ひでえ〜・・・

謙一の声に一人同時に叫ぶ。

まだ、何かいつていてる謙一を差し置いて

又、監督の愚痴を言い始める。

三人の反応がなれているのは、  
きっとこれが日常なのだろう。  
三人の顔には、笑顔があふれていた。

## FILM1・偽りの平穏トニー（前書き）

遅くなってしまって申し訳ありません。  
これで、FILM1は終了です。

## FILE 1・偽りの平穏エエエ

「和ちゃん！」

部長こと、生島和磨に抱きついたのは、赤色の天パーの髪が異様に印象に残る少年・霧島栄介きりしまえいすけだつた。

「おいやめろつて、栄介！」

「酷いな、和ちゃん。」

そういうの、部長はもつとのりがよくなきやいけないんだよ？」

「そんな小首を傾げても可愛くなんかあるか〜〜！」

「そういうのを人権損害つて言つんだよ？」

「これだけでなつてたまるか！〜！」

「・・・先輩・・・」

「栄介！〜！」

二人は小学生並みの言い争い（・・・もとい、和磨が怒鳴り散らす。）

をしている所で後ろからの声に「一人+一人はそろつて振り向き、ボニー・テールの黒髪の同級生を認める」と

そのまま一人をおいてそのまま前を向き無言で足を進めた。心なしか、二人の顔が引きつっているのが気になるが、そこは気にしないでおこづ。

だが、そのまま彼女は早足でそのまま栄介の背後に近寄ると・・・そのままかばんで・・・

「無視してんじゃないわよ！〜！」

バコン！〜

小気味いい音が当たり一面に広がる。

「いつたいな〜、麗華れいが！〜！」

「いつたいな〜。じゃないでしょ、栄介！〜！」

何彼女おいてつてんの！〜！」

「・・・・・・・・・・・・・・

「無言になんな！！」

この一人の言い争いに置いておかれた+1名・・・  
もとい後輩は必死に頭を整理しようと小言で先ほどの台詞を繰り返す。

「麗華・・・彼女・・・彼女！！」

頭を整理し終えたらしい後輩が、驚愕の声を漏らす。  
その声とともにピンで留めた黒髪の前髪がゆれる。  
驚愕している後輩を落ち着かせようと和磨は  
前にある少し低めの肩を一回たたく。

「落ち着こ～ぜ、心事」

「どうやつて落ち着けつていうんですか！？」

「いいから・・・

「・・・・・つすみません、せんぱい。取り乱してしまって・・・

我に返つたらしい後輩、秋冷心事は顔を赤く染めてから  
あわてて謝った。

「別に謝ることでもないさ。」

「はい・・・。

「でも、先輩・・・あの人は？」

「風牲麗華、栄介の幼馴染で恋人。

俺らと同じ中三さ。」

「・・・・そうですか・・・」

「さて、馬にけられないうちに俺たちは退散するとするが！」

「・・・・はい」

そのまま二人はいまだ言い争いをしている一人をおいて帰つていつた。

「ねえ・・・いつまでこんな演技を続けていくつもりなの？」  
突如言い争いをやめた麗華は小さくつぶやく。

それに答えたのは「さあな」というたつたの一言だった。

「もう帰ろうよ、麗華！！」

そういうと同時に走っていく栄介を追いかけて麗華が走り去ると後にはもう何もなかつた。

（合宿一週間前）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7000f/>

---

純白の心に血色の模様

2010年12月10日02時43分発行